

谷崎における母への憧憬とエロティシズム

— 「母を恋ふる記」と「少将滋幹の母」を中心に —

吉美 顕*

目次

- I. 序論
 - II. 本論
 - 1. 「母を恋ふる日記」における母への憧憬
 - 2. 「少将滋幹の母」における母への思慕とエロティシズム
 - III. 結論
-

I、序論

谷崎のいくつかの作品から読み取れるのは、幼少時の記憶に残っている母のイメージの反映である。谷崎は母の白い肌のイメージから女体美の理想を形成し、それがエロティシズム重視の傾向にまで発展するようになる。母のイメージから形成された女性美は谷崎文学の核として取りあげられるのである。谷崎の母への憧憬がよく現れている作品は、「母を恋ふる記」（「大阪毎日新聞」1919・1・18～2・19、「東京日日新聞」1919・1・19～2・22）である。その後、谷崎は「少将滋幹の母」（「毎日新聞」1949・11・16～1950・2・9）の中で母の話を語る。晩年の作品「癡癡老人日記」では母がエロティシズムの対象として登場する。この三作品の共通点は亡き母との再会が夢の物語において実現している点と、母の美しい姿を通して女体＝美であるという図式を構築したことである。そこで本稿では、谷崎が亡き母との再会を通して何を表わそうとしたのかについて、述べていく。

* 九州大学、日本学術振興会外国人特別研究員、近代文学

II、本論

1. 「母を恋ふる記」における母への憧憬

「母を恋ふる記」の主人公である「私」が「自分は今年34歳になる。母は一昨年の夏以来此の世の人ではなくなっている」¹⁾と言っているように、ここでの「私」は谷崎本人である。谷崎の母関がなくなったのは1917年5月のことであり、その時は谷崎は32才であった。この小説を執筆するころには谷崎の父倉五郎は脳溢血で病床にあって、1919年2月14日に死亡した。谷崎は父の死を目のあたりにしながら、母の死後、母への思慕の小説を書いたのである。この小説は実生活をそのまま素材にしており、作家がその上に幻想を結んだものである。作者は幻想を「縦糸として若い美しい母に対する官能的な思慕を色濃く織り」²⁾なしているのである。

谷崎が「母を恋ふる記」の中で述べている重要なことは、自分の母を若て美しい母、つまり永遠なる女性として保存したいという願望である。母を通した女人像の成立は、夢の中でなされている。谷崎はこのような夢物語を「母を恋ふる記」の前に1917年11月に発表した「ハッサン・カンの妖術」(「中央公論」1917・1)の中で試す。インド人であるマティラム・ミスラがハッサン・カンの神通力によって「谷崎」は須弥山の世界へ入るようになる。その世界で出会った母は、「一羽の美しい鳩となつて」いる。作品中の母の没年は谷崎の母関のそれと同じ年である。鳩は「大宇宙の万物の母」であり、「再生」³⁾の象徴だと言われている。鳩は母の魂であり、亡き母との再会を意味している。このように、谷崎は鳥のイメージを母に投影させて観念として母を作り出したのである⁴⁾。

1) 「母を恋ふる記」『谷崎潤一郎全集 第6巻』(中央公論社、1981・10)219頁。

2) 酒井森之介『谷崎潤一郎の文学』(塙書房刊、1967・7)153~154頁。

3) 鳩は一般的に天国を象徴しているが、その他にいろいろ意味がある。鳩は「アプロディテの乗り物を引き、またシリヤのアスタルテに捧げられた。」人間の生命、誕生、「運命の死」を支配する運命の三女神「および、「月の3つの相と関連」をもっている。「光輪(nimbus)をつけて、聖霊」、「マホメットは聖霊のハトによって靈感を受けたという話」もある。その他にも精霊の導きや平和や永遠の生命は永遠の魂などを表している。鳩はインドでは食欲のイメージであるが、谷崎はインドのイメージと違うヨーロッパ的な鳩のイメージを描いている。アト・ド・フリール『イメージシンボル事典』(山下主一訳)、(大修館、1984・3)184~185頁。

4) 「母を恋ふる記」には、「いにしへに恋ふる鳥」というエピソードがつけられている。ここでの鳥は昔のことへの懐かしさを表している。「少将滋幹の母」では、「梟の啼く声」を耳にする。谷崎の作品では、鳥や鳥の鳴き声が母の靈魂として使われている。「異端者の悲しみ」では官能的な女性が夢の中で鳥になっている。鳥の象徴は魂の

夢で出会った母は息子が善人にならなければ自分は「仏」になれないので、「正しい人間になつておくれ」と頼む。「私は「お母さん、私はきつと、あなたを仏にしてあげます」と答えて、彼女の柔らかない胸の毛を、頬に擦り寄せたきり、いつ迄も其処を動かうとしなかった」⁵⁾のである。谷崎の母の懷に抱かれない気持ちは、「母を恋ふる記」の「私も一生懸命に抱き付いて離れなかつた。母の懷には甘い乳房の匂が暖かく籠っていた」という描写からもうかがえる。これらの作品に顕著に表れているのは、母の姿に対する哀切な思慕である。

谷崎には父の事業の失敗に起因する心労と病気によって、母の美しさが崩れていくことが耐えがたかったのだろう。谷崎にとって、醜い母の存在は考えられなかった。しかし、幼年時代の美しかった母を獲得するためには、自分自身が幼児の時代にもどるしかなかった。それで、谷崎は小説の主人公を「七つか八つの子供」に設定している。谷崎の場合は6、7才の幼いころに抱かれた母への思慕がいつも根底にある。谷崎は後年の母の容貌を頭から消して、幼少時の記憶に存在した美しい肉体を蘇生させようとしたのである。生前の母の描写を見ると⁶⁾、現実的であり、幼少時の記憶にもとづく美化は見られない。それに対して、死後の母の描写は官能美が感じられる⁷⁾ほど美しく描写されている。醜い母の像をいかに「美的なイメージに転換させようか」という、母の再生作業⁸⁾が谷崎に課せられた使命であった。「母を恋ふる記」はこの使命に従って書かれた作品である。

「私」は道を歩きながら、悲しみを感じる。「哀音に充ちた三味線を聞く時のやう

実体化であり、永遠なる死者、女性、あるいは美をさらに、魂の転生を暗示するとされる。ここで鳩の出現は亡き母と転生と母の美を表すためであろう。前掲書3。63頁。

- 5) 「ハッサン・カンの妖術」『谷崎潤一郎全集第4巻』（中央公論社、1981・2）552頁。
- 6) 谷崎の作品「異端者の悲しみ」は随筆のような作品であり、谷崎の家の生活を描いた作品である。この時期は谷崎の母はまだ亡くなっていない。この時期の母についての描写を見ると、美しい母ではなく、普通の主婦の姿である。
- 7) 酒井森之介は谷崎の生母に対する思慕についてアンケートに答えた谷崎の文章を引用している。ここでは母のイメージに崇高という言葉を使っている。「『女の顔』の一節にある「崇高と云へば、何かそこに永遠的なものが含まれて居べきだと思ひます。私は空想の中で屢々亡くなつた母の姿を浮かべます。それも臨終の際の姿ではなく、いつどんな時の顔だか知れないが、多分私が七つか八つの子供だつた頃の、若い美しい（私の母は美しい女でした）母の顔を浮かべます。それが私に一案崇高な感じがします。」といふ言葉である。」谷崎は崇高を表す言葉を使って母を表現しているようが、このような崇高な母によって女性崇拜、永遠なる女人像が形成されたと思われる。前掲書2。155～156頁。
- 8) 永栄啓伸は、谷崎は母の死後、幼い時見た美しい母の「肉体を剥ぎ取ることはなかつたか。肉体という地上的なイメージをとりのぞき、単なる〈白き〉をもった観念の世界にまで飛翔することによって、そこに美を希求しようとする発想は、現象の行方にアイデアをみるプラトニズムを援用するにいたる要因があつたことを暗示している。」と述べている。永栄啓伸『谷崎潤一郎—母性への視点—』（有精堂、1988・7）139頁。

な、冴え冴えとした、透き徹つた清水のやうに澄み渡つた悲しみ」が「私」の心に染み込む。三味線の音は、乳母といっしょに寝る時に聞いた音で、その時期への懐かしさが現れている。この三味線は、「私」の様々な幼少時代の思い出と繋がっている。

谷崎の母への憧憬は、母に対する愛ではなく、醜い母の容貌を抹消して、美しい肉体の女性、官能の快楽を求めるための、「母からの逃走」であるという意見もある⁹⁾。しかし母からの逃走というよりは情愛に充ちた母の懐に戻りたいという願望であると言える。「母を恋ふる記」には幼い時の「私」と現在の「私」が存在するが、夢をみているのが子供の「私」であり、その時期に戻りたいという強い願望があるので、幼少時代に設定したのである¹⁰⁾。

「私」は「母」の懐を求めて歩き続ける。「私」はやがて自分の家を見付けて、「母」に会った。「母」は自分の子供は大きくなっているはずだと言い、「私」という人物を自分の子ではないと拒否する。また、「私」の「母」は美貌の持ち主であったが、今の「母」は老婆の姿であり、声も嘎れているので、「私」は自分の「母」として認められなかった。また「私」は一人で歩いていく。その時「明るいもの」が見える。それは灯火の光ではなく、「銀が光っているやうな鋭い冷たい」、明るい月の光である。その光は「永遠に美しく反映する」¹¹⁾ものであり、「母」を象徴している。今までの「私」の心は「古沼」だったのだが、月の光の出現は愛情深い美貌の「母」に会える可能性が見えることの伏線であろう¹²⁾。これは34歳の「私」から子供の「私」に変わる展開である。「現像の世界を躍り越えて其の向う側にある永遠の世界を見」¹³⁾ようとした谷崎にとって、月は、「永遠不滅のイデア界を象徴する存在」¹⁴⁾であり、死と再生のシンボルであるとも言える。月光に照らされている女性の屍

9) 千葉俊二は、谷崎のわかまを「受け入れてくれる若くて美しい母親ではなく、母親であることによるのみ彼に愛を強要し、彼を束縛する母親で」と説明されている。谷崎は母の束縛から逃げようとしたのではなく、美しい肉体の女性を求め、理想の女人像を作るため、幼少時代の母の姿を見いだしたと思われる。千葉俊二『論考谷崎潤一郎』（桜楓社、1980・5）98頁。

10) 次の文章から小児の意識世界がよくわかる。「空はどんより曇つて居るけれども、月は深い雲の奥に吞れて居るけれど、それでも何処からか光が洩れて来るのであらう、外の面は白々と明るくなつて居るのである。－（中略）－ 遙かな遙かな無窮の国を想はせるやうな明るさである。その時の気持次第で、闇夜とも月夜とも孰方とも考えられるやうな晩である。」

11) 月は女性を象徴している。さらに母体、愛、想像力、時間と死の推移、などを表している。前掲書3。438頁。

12) 「ああ月だ月だ、海の面に月が出たのだ」私は直くとさう思った。ちやうど正面の松林が疎らになつて、窓の如く隙間を作つている路は未だに暗いけれども、海上の空は雲が破れて、其処から皎々たる月がさしているのだらう。見ているうちに海の輝きはいよいよ増して来て、此の松林の奥へまでも眩しいほどに反射する。」

13) 「早春雑感」『谷崎潤一郎全集第22巻』（中央公論社、1968・8）69頁。

骸¹⁵⁾は、美そのものであり、月は女性の死骸の美に象徴されるものになる。「母を恋ふる記」の中で谷崎の母は死んでいるが、この場面において幻想の世界の中で美しい母との邂逅が実現するのである¹⁶⁾。このように、谷崎の文学作品において月というイメージは両義性を現している。「少将滋幹の母」では、国経が「不浄観」¹⁷⁾をするとき、月光は屍骸へ導く光であったが、滋幹には幼い時の母に再会できる光りとして作用している。

海の方から晴れてくる空は、「私」が歩いている所まで射ってきて明るくなる。それで自分も知らないうちに「海の前 前景のほとりに」立たされてしまうのである。そこで「私」は自分が歩き続けてきた道が海に沿っていることに気づく。海は「私」を母のところへ導いてくれた。「私」にとって、海¹⁸⁾は母の子宮や母の懐である。したがって、谷崎にとって海への道程は子宮回帰である。いくつかの谷崎作品には海と母と密接な関係が現れている¹⁹⁾。

「私」が考えた通りきれいな女性をお姉さんと呼びたかったのであるが、その女性が「お前は私を忘れたのかい？私はお前のお母様ぢやないか」と言う。「私」は「母」が「こんなに若くて美しい筈」がないと考えながらも「ああ、お母さん、お母さんでした

14) 細川光洋は谷崎作品「誕生」の中で「望月の欠けたることなしと思へば」という文章は、「現世に永劫榮華の絶対境を現出させようとしたその人こそ」谷崎にちがいないと言っている。細川光洋「谷崎潤一郎イメージ考月」『国文学 解釈と教材の研究』（學燈社、1998・5）129頁。

15) 「月の光は其れを射徹して却つて空気の中よりも明かに、若々しい屍骸の容貌に焦点を作つて居るのである。－（中略）－どういふ死に方をしたのであろうか？ひよつとしたら死んだのではなく、すやすやと眠つて居るのかと思はれるほど、その顔は穏やかに且生々しく輝いて居る。－（中略）－彼女の高い鼻は殆んど水面と擦れ擦れになり、何だか息が私の襟元へ懸かるやうに感ぜられる。あまりにも彫刻的で堅過ぎる恨みがあつた其の輪郭は、濡れて浸つて居る為めに却つて人間らしい柔かもを持ち、黒味がかつて居るほど青かつた－（中略）－月の光にその青みを奪い取られて、鱸の如く銀色に光つて居たのである。」「西湖の月」『谷崎潤一郎 第6巻』（1981・6）224頁。

16) 谷崎の作品「十五夜物語」の月は再生と死の光の両義性をそなえている。「天王寺の森から上る月を便りに、楽しい行くすえを夢見て居たが、今宵の満月は二人の為めに来世を示す真如の光り。－どうせ死ぬならあの月のかげの曇らぬうち、母上の命日に間に合ふやうに、最期を急ぐがよい分別。」「十五夜物語」『谷崎潤一郎全集第4巻』（中央公論社、1981・2）501頁。

17) 「仏語、観法の一つ。修行者が執着心を除くために、肉体の死んだ滅びゆくさまを觀察し、その不浄を悟ること。」「日本国語大辞典」（小学館、1972・12）850頁。

18) 海を象徴するものは母や子宮以外にもいろいろある。女性（母親）のシンボル、太女神の母、原初の創造などの意味を表す。また、その海の意味は死の存在、人間の魂、人間精神の解放などである。前掲書3. 554～555頁。

19) 「海と云う茫漠とした真暗な処が、自分の幼い折に住んで居た故郷であつて、自分は今ここに居る母に会いに行くのだ。」というふうに、海への回帰願望が見える。海の中で「乳を求めぬ哀れな赤児のやうに思はれ、自分こそ母に救つてもらいたい氣」がした。谷崎は海をイメージを通して、エロティシズムと母性思慕への回帰を志向した。「不幸な母の話」『谷崎潤一郎全集第7巻』（中央公論社、1981・9）227頁。

か。私は先からお母さんを探していたんです」と答える。やがて、「私」の宿願であった若くて美しい母に夢の中で会えるようになった。その宿願の達成は、「私」が子供であったため成立しているが、眼が覚めると、今までのことが夢であったことがわかる²⁰⁾。夢の中で「母」と「私」が一体化したのである。

谷崎は幼少時代の懐かしい美しい母を蘇らせ、文学作品に母性思慕の主題を結晶し、作家の若いころに宿った女性に対する憧憬、少年の目で見ている官能を享受したのである。このような官能的な快樂によって母性憧憬が形成されたのである。

2. 「少将滋幹の母」における母への思慕とエロティシズム

谷崎は「少将滋幹の母」という作品を執筆する。この小説は一千年前の日本の上流社会にあった説話²¹⁾に作家の空想を加えて、作り出したものである。特に、母との再会は谷崎の空想による物語である²²⁾。

小説中、母を左大臣時平に奪われた滋幹であるが、特別に母に会う許可を得る。滋幹は「母の衣には、何といふものか特別に甘い匂のする香が薫きしめてあつたので、じつと無言で抱きしめられている間が好い気持であつた。」それで、その香りが主人公の体に染み付いていたので、「母が自分の身に付き添っているやうに」思った。こうした叙述は「母を恋ふる記」の中の「母の懐には甘い乳房の匂が暖かく籠っていた」という文章と同様、作家の幼少時代の母への憧憬を表している。

この小説は一部では説話の形式をとっているが、その後二部で描かれる語り手の日記の部分が谷崎の空想によるいわば、谷崎の個人的な独白である。したがって、谷崎の母への憧憬をたどって行くには、後半の日記の部分を特に考察するのが有効だということになる。この日記は「昔の母にめぐり逢う迄のいきさつを書いた、一編の物語で

20) 夢の中での官能的美の追求や女人像の形成は「異端者の悲しみ」からもよく窺える。「異端者の悲しみ」の主人公である章三郎は、夢の中で「美しい白鳥の幻をぼんやり眺めて居ることが、不思議な喜びと快きとを彼の魂に味はせた」のである。仰向きになっている主人公の眼の上に輝いて、それがこのような「白鳥の夢となって」いる。章三郎は自分自身も「自分の自由意思で、思ふがままに好きな錯覚を作り出す能力がありはしないか」と考えながら、「現在眼の前に浮かんで居る鳥の姿を更に妖艶な女の幻を擦り換へるやうに、次第次第に想念を凝らし」始める。章三郎は「美しい女の肉体を渴仰」し、「歓楽のための献身的な」女性を求めて夢を見るが、眼が覚めると現実の世界に戻ってしまう。その歓楽の世界へもっと落ちたいので、夢を見続けたいのである。

21) 「少将滋幹の母」で説話として扱われている作品は、『後選集』『白氏文集』『竹取物語』『伊勢物語』『古今集』『大和物語』などである。

22) 鳥居邦朗は「少将滋幹の母」は、谷崎文学の集大成であると言えつゝ言いながら、幻想の物語の世界について、次のように指摘している。この作品を執筆する前に、谷崎は「すでに源氏物語の訳も完了しており、平安文学その他に対する該博な知識によって、それらの文献を縦横に駆使して物語世界を作り上げている」鳥居邦朗「少将滋幹の母」『国文学解釈と鑑賞 特集谷崎潤一郎』第4巻8号、(至文堂、1983・5) 79頁。

あるといつても」（「少将滋幹の母」の冒頭部分）いいのである。

滋幹の日記をみると、滋幹は44、45才で、母は60才前後である。滋幹はその年になっても母のことが忘れられず、5、6才の子供の頃のことが記憶に浮かび上がってくる。滋幹の美しく尊い母への思慕の情は特別であり、彼の頭は「母への憧憬で埋まつて」いた。そして、その母は滋幹によって理想的なものに美化される。滋幹の母北の方は「世に稀な美人」であるが、詳しい容貌の描写はなく、その美しさの根拠となるものは5才の滋幹と国経の目に残っている美しい残影だけであった。しかし、滋幹の母が国経から時平に引渡される場面が美しく描写されている²³⁾。このような場面に、「一卷の絵巻」のように、「色彩美の世界」²⁴⁾が感じられる。この小説の人物や背景の描写をみると、確かに色彩美が際立っている。さらにその色彩美によって、様々な美的快楽の世界が感じられる。

滋幹が母に会ったとき、「ふと、眼の前をきりと落ちたものがあるので、訝しみながら振り仰ぐと、母が涙を一杯ためてあらぬ方角を視詰めて」いた。滋幹が母の容貌が美しいと思ったのはこの一瞬であった。この時の「母の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼き付けられて、生涯消えずに」いたのである。滋幹の父国経にも同じ現象が見られる。父は北の方を愛したにもかかわらず、性の衰え²⁵⁾を感じて、結局時平に彼女を譲ってしまうのである。彼は70才で、快楽における危機意識を感じたのかもしれない。性が衰えた国経は北の方の肉体に視覚的に耽溺する。性が衰えて、女性の肉体に耽溺する行為は「鍵」の教授や「瘋癲老人日記」の老人を思わせる。これは、国経や教授や老人の性に対する妄執であると考えられる。彼らは性が衰えていくことによって、一層快楽の欲望が刺激されるので、ますます強い性の妄執にとられるのである。

国経は妻を奪い去られてしまった後、妻を忘れかねて「不浄観」を行う。彼は屍体のところへ行って仏間にあるように凝然と端座して、「ときどき死骸の方を見ては又半眼に眼を閉ちて沈思し出した」のであった。こうすれば「人間のいろいろな官能的快楽が、一時の迷ひに過ぎないことを悟るやうに」なる可能性が高くなるからである。ここは

23) 「最初、国経が御簾の蔭へ手をさし入ると、御簾の面が中からふくらんで盛り上つて来、紫や紅梅やさまざまな色を重ねた袖口が、夜にもしるくこぼれ出して来た - (中略) - 人間の大きさを持つた一輪の花の如きものは、漸う半身を現わしたところで、まだ国経に袂をとらへられたまま静止して、それ以上姿を現はすことを拒んでいるやうに見えた」

24) 亀井勝一郎「『少将滋幹の母』覚書」「文芸 谷崎潤一郎読本臨時増刊」（河出書房、1949・3）87頁。

25) 「最近になつて老人はだんだん愛し方が執拗になり、冬の間は毎夜北の方を片時も離さず、一晩おゆう少の隙間も出来ないやうにびつたり体を喰つ着けて寝る」

谷崎の頽廢的美の壯絶さが際立つ場面である。国経は「心の奥に映つているかの人の美貌を払拭して、煩惱を断ち切つてしまひ」たかったのである。

滋幹は不浄観をする父親に対して「お父様、お願いです、私の大好きなお母さまを汚さないでください。」と叫びたいほどの反感をもっていた。父親は若くて美しい肉体の母親の姿をそのまま保存することなく、「不浄観」を行うことによって、母親の存在を消そうとしたからである。ところが、滋幹の父は不浄観のかいなく、愛執の煩惱の中に悶絶してしまう。

二人の男性の女性への愛の在り方は異なる。国経の愛の形式は若くて美しい北の方の肉体への耽溺つまり官能的な快樂にもとづいており、滋幹のそれは美しい母の姿を崇高なまま保存したいという願望にもとづいている。両形式はともに女性崇拜であるが、滋幹のそれは理想的な美しい女性作りのための女性崇拜である²⁶⁾。

その後、滋幹が母に会う許可はおりなくなった²⁷⁾。そのために滋幹は40年ほど「おぼろげな記憶の中にある面影を理想的なものに」作り上げた。滋幹の中にある母のイメージは22才の「髪の長い頬の豊かな貴婦人」であったが、現在は60才を越した老婆であり、世を捨てた尼になっている。滋幹は現在の母、つまり尼になった母が住んでいる西坂本を訪ねる。そこを見回ったとき、鼻の鳴き声が聞える。この母との再会の場面が「母を恋ふる記」と非常に似ている²⁸⁾。細江光は精神分析学者のいわゆる「移行対象」という概念を使って、子供と母の再会の場면을説明している。「移行対象」というのは、母が「幼児の傍にいてくれない時に慰めてくれない母の代用物で、母親を思い起こさせる」²⁹⁾ものである。白い足、音、鳥、服、光などがその「移行対象」に当てはまる。「母を恋ふる記」と「少将滋幹の母」には鳥の鳴き声や月の光や帽子などの共通したモチーフしたものが使われる³⁰⁾。

26) 細江光は谷崎のこのような性向は、「近親相姦的欲望と罪の恐怖」から出ている問題であり、谷崎は「母に愛されなかったという印象が深く刻み付けられているとしか考えられない」¹⁾と述べている。細江光「谷崎潤一郎の母—その否定的側面をめぐって」『国文学年次別論文集近代2』（学術文献刊行会、1992・6）207、227頁。

27) 「自分は十一二歳の頃、幾度か母に会いたいと云ふ望みを洩らしたことがあつたが、世間のことはさう簡単に行くものではありません、お母さまはもう余所のお家の人なのですと、—（中略）—お母さまはもうあなた様のお母さまではなくて、われわれよりは身分の高いお方のお母さまなのですと、乳母はさうも云つて聞かした。—（中略）—自分は年が行けば行くほど、母と自分との距離が遠くなるのを感じた。—（中略）—母に対して一種の僻みを抱いていたらしいので、そんなことが一層母との間を心理的に遠ざける因となつたのでもあらう。」

28) 「母を恋ふる記」の中でも母との再会の道の設定は夜であり、誰もいない道であった。「少将滋幹の母」でも道には誰もいないし、夜の道であった。さらに、鳥の鳴き声も聞こえる。月の光があって、暗い夜の道が明るくなる。明るいところを主人公達はその明るさに沿って歩いていくのである。

29) 前掲書6. 216頁。

「私」が、月光が花の上を照らしている所を歩いていくと、小柄で帽子を目深に被った僧侶と思われる人が見える。その尼が自分の母だということに気づいた滋幹は、「お母さま！」と呼んだ。ところが、その尼は体が大きい男の人の出現によって、よろよろしながら道ばたの岩に座りこむのである。子供でない母との再会は不可能であるというふうな話が設定されている。こうした奇抜な設定に子供対母という一つの愛の理想の形式を提示しようとする谷崎の執着が伺える。滋幹が跪いて下から母を見上げてみると、母の顔は「花を透かして来る月あかりに量されて、可愛く、小さく、円光を背負ったやうに」見えた。「四十年前の春の日に、几帳のかげで抱かれた時の記憶が、今歴々と蘇生つて」、「一瞬にして六十才の幼童になつた気」がした。滋幹は幼少時代に戻り、自分の顔を母の顔に寄せると、昔、感じた母の懐から漂っている香の匂を思い起こした。滋幹はまるで「甘えているやうに、母の袂で涙をあまたび押しして」拭いたのである。ここでは美しい夢の勝利がうかがえる。この作品の中でもやはり母との再会は夢の中で成立し、それも子供の世界で成就するのが重要なポイントである³¹⁾。

ここで注目したいことは、崇高な母のイメージの描写だけではなく、妖婦的な母の描写である。滋幹の母はすでに平中という情夫がいる。平中は恋人である北の方との関係を時平に知られ、その後、時平に彼女を取られてしまう。平中の北の方に対する感情³²⁾は、「一編の色恋よりは深いもの」であった。ところが、平中は北の方に会うのは許されなかったので、結局、二人の関係はこれで終わる。好色漢である平中はもう一人の恋人侍従の君の方へ傾いていく。平中は侍従の君の方に「苛酷な誡練」をあたえられる。侍従の君の方は「男を焦らすことに特別な興味」を抱いていた。ここで谷

30) 昭和34年10月「中央公論」に発表した「夢の浮橋」にはほととぎすが登場する。

「五十四帖を読み終り侍て
ほととぎす五位の庵に来啼く今日
渡りをへたる夢のうきはし」

「夢の浮橋」『谷崎潤一郎全集第18巻』（中央公論社、1982・4）147頁。

31) 子供である「私」の「母」に対する憧憬は谷崎が読んでいたと思われるヴァイニングの母親論を想起させる。「母とはすなわち種族の永遠の茎、けっして枯れるこのない、大地こしかり絡みついている根茎である。個人でしかない男性はまさにその反対で己れの無常をつくづく思い知る。男性をして母性的な女性を永遠の相の下で眺めさせるのは、まさしくこの男性の特徴である。ゾラによれば、妊婦は偉大の理念である。一人黙する妊婦の中に種族の大いなる安泰がある。妊婦の前に立つ男性は己れを実に小さく感じ、同時に平和と安らぎを感じる。高邁不遜な憧憬はすべて霧散する。その上、世界との一体感さえそこに生ずるかもしれない。要するに男性は妊婦の前で子供となる。—（中略）— 母親は彼をやさしく笑顔で見守り、彼のことを何から何まで知尽、宥め、慰める。」オットー・ヴァイニング「性と性格」（竹内章訳）、（村松書館、1980・5）242～243頁。

32) 平中は滋幹の腕に歌を書いて、母に見せるようにする。母はその詩を読んで泣き、母も「ゆくすえの宿世も知らず我がむかし契りしことはおもほゆや君」という歌を滋幹の腕に返歌を書く。

崎は滋幹の母に崇高さに加えて、エロティックなイメージをあたえ、さらにもう一人の悪魔的女性を登場させている³³⁾。平中には侍従の君の方の糞尿を集め、その匂いを嗅いだり、飲んだりする性的倒錯性があったが、その後、他の女性と「色事」ができなくなり、一方、侍従の君の方は「ますます驕慢に、残酷に」なる。彼が熱をあげればあげるほど、彼を冷たく手打ちしたり、突っ放して、結局それが原因で平中は亡くなるのである。侍従の君の方のこのような振る舞いは平中によるものだと考えられる。谷崎の初期作品と同様、男性によって女性に悪魔的様相が植え付けられるさまがここで再現されている。

夢の中で美しい母との出会いは最晩年の作品「瘋癲老人日記」の中でも繰り返される。ところが、この場合は「母を恋ふる記」とは多少異なる。大正の作品では亡き母に対する母性思慕の意味が大きいが、「瘋癲老人日記」の中ではエロティシズムの対象として扱われている。老人は「母ノ夢ヲ見ル。」夢の中に現れた母は「予ノ記憶ニアル最モ美シイ最モ若イ時ノ姿ヲシテ」いた³⁴⁾。ここでは亡き母の懐にもどりたいという願望より最初から亡き母の若いときの美しさについて言及している。特に素足の対比に注目したい³⁵⁾。老人は「美人ト云ハレタ時代ノ彼女ノ姿ヲ記憶シテ」いた。老人の記憶に残っている母の美しさと、花嫁である颯子に感じる美しさは異なる³⁶⁾。老人は両者の肉体美と化粧の方法の相違点について注目する。明治の女性は化粧が簡素であり、颯子の場合は西洋的厚化粧である。老人は亡き母が「自分ノ妻、自分ノ子供達ヲ犠牲ニシテモ彼女ノ愛ヲ得ヨウトスル。－（中略）－得ヨウトスルノヲ、何ト思フデアラウカ。」と心配し、また、「俣ガコノヤウナ狂人ニナリ、コノヤウナ嫁ガ我が家ニ入り込ムニ至ツタコトヲ、夢ニモ考ヘタダラウカ。」と疑いながら、「自分デスラ、コンナコトニナラウトハ思ヒモ寄ラナカツタ。」と告白している。老人は明治時代の母の美しさと昭和時代の颯子の美しさを比較して、明治より昭和の美人、つまり西洋的な女性

33) 「皮肉屋の女の癖は改まらず、ややもすれば意外な悪戯を考へ出して鬨りものにし、目的を果たさずには帰つて行く男のあとから舌を出したり、べかかうをしったりすることが三度一塵らいは 必ずある －（後略）－」

34) 「瘋癲老人日記」『谷崎潤一郎全集第19巻』（中央公論社、1982・11）80頁。

35) 谷崎は母の足について、特に美しく、さらに真っ白な足を描いている。それは母に関する作品「夢の浮橋」にもよく現れている。「床から足を垂らして、池の水に浸かしていたが、水の中で見る母の足は外で見るよりも美しかった。母は小柄な人だったので、小さくて丸っこい、真っ白な挿入のやうな足をしていたが、それをいっと水に浸けたまま動かさず、体中に浸み渡る冷たさを味はっている風であつた。」谷崎は大人になってからもその美しい母の足が思い出されたのである。

36) 「二人ノ美人ノ間、明治二十七年ト昭和三十五年ノ間ニ、日本人ノ体格ニ何云フ隔タリガ生ジタコトカ。母モ美シイ足ヲシテイタ。シカシ颯子ノ足ヲ見ルト、ソノ美シサガ全ク違フ。殆ド同ジ種類ノ人間ノ足、同ジ日本人ノ女ノ足トハ思ハレナイ。－（中略）－颯子ノ足ハ柳葉ノヤウニ華奢デ細長イ。－（中略）－母ノ足ハ幅広デアル。」

美の魅力に惹かれていたことを明らかにしている。老人の母を見る目は、「母を恋ふる記」の「私」や「少将滋幹の母」の滋幹よりも母に対して客観的で突き放した見方をしており、母と子というかけがえのない血のつながりを超越した女性観になっている。

谷崎は女体美を描く時、肉体の部分によって全体を連想させる手法を使っている³⁷⁾。足や顔は肉体の一部でありながら、全体的な美的表象になっている。このような傾向は「母を恋ふる記」の中でも同様で、ここでは鼻を使っている³⁸⁾。これは谷崎文学の特徴であるフェティシズムの性向であると言える。フェティシズムは「肉体の一部が、その全体と等価の意味を有する性的な志向性」³⁹⁾のことを言う。このフェティシズムは倒錯的性的嗜好である。

「癡癡老人日記」の場合、大人の中から見た美の観点が特徴である。谷崎の初期作品は大人の世界へ転換していく少年たちの様相や、少年の「無自覚的なまに官能に目覚める姿を生き生き」⁴⁰⁾と表現されていた。さらに彼は甘美で懐かしい回想を少年たちの目を通して、日常生活から虚構の世界を加えた官能的な世界を描いた⁴¹⁾。大正期「母を恋ふる記」や昭和期「少将滋幹の母」には大人から子供への美の焦点の転換が見える。しかし、「癡癡老人日記」においては子供から大人へ、大人から子供への転換は見えず、大人から見た美が焦点になっている。

III、結論

37) 谷崎は一種の腫描法を使って美的効果を表わしているが、そのことについて、「芸術一家言」の中で言及している。「部分が成り立つと同時に全体が成り立ち、全体が成り立つと同時に部分が成り立つ。たとへば色と光の如きもので、その本質はもともと一つである」「芸術一家言」「谷崎潤一郎全集第20巻」（中央公論社、1982・6）44頁。

38) 「少しづつ、実に少しづつ、鼻の頭の尖りが見えて来る。－（中略）－立派な、上品な鼻であつてくれればよいと思つた。こんな月夜にこんな風流な姿をして歩いている女を醜い女だと思ひたくなかつた。さう思つているうちに、鼻の頭はだんだん余計に頬の向うから姿を表して来る。－（中略）－たしかに其れは高い鼻に違いない。高い、而も立派な鼻に違いない。」谷崎文学において、鼻は女体の描写の中で目立たないが、初期の作品の中で「颯風」という作品の中では女性の鼻の穴をみて最初は不気味なところがあったが、いつのまにか小鼻の形に魅力を感じるのである。また、河合の場合はナオミの鼻について「まるで私の体の一部も同じことで、決して他人の物のやうに思へません。」というのである。

39) 平野芳信「鼻」「国文学解釈と教材の研究」第43巻6号、（學燈社、1998・5）133頁。

40) 千葉俊二編「解説 越境する子供たち」「潤一郎ラビリスV」（中央公論社、1998・9）288頁。

41) 伊藤整は少年と少女の目に映る人生は「その現実の全部が姿を見せず、可能性、夢想の怖れ、懼れなどを伴つて感じられる。それは闇の中にもふと見たものの恐ろしさ、霧や雲の中からもふと姿を現はして消える風景の美しさなどに似た効果を持つている。」と言っている。谷崎はこのような手法で作品を書いたと思われる。伊藤整「解説」「谷崎潤一郎全集第7巻」（中央公論社、1981・9）242頁。

谷崎の作品のモチーフは、幼少時代の経験の記憶によって形成されたものが多い。生母の関に対する感覚が、谷崎の美学の根源におかれている。谷崎は幼少時代の母との邂逅によって、自己の内部に美的残像を蘇生させた。谷崎は幼少時代の背景と虚構という二重構造によって、女性美を追求しており、母を美の象徴として捉えている。谷崎の母性思慕の表現は感覚的であり、そこには陰影美さえ感じられる。昭和期にも大正期の「母を恋ふる記」のように清らかな愛情深い美しい母を強調した作品もある。その例としては「少将滋幹の母」や「瘋癲老人日記」などが挙げられる。「母を恋ふる記」と「少将滋幹の母」において母への憧憬は、幼少時代にみた母の姿がもとになっているが、両作品には相違点が見える。大正期の谷崎における母は、美しく、優しく、崇高なものに美化されているが、昭和期にはエロティズムつまり、官能的で妖婦的側面もある母が描写されている。

【参考文献】

「テキスト」

『谷崎潤一郎全集第6巻』（中央公論社、1981・1）

「雑誌」

『文芸谷崎潤一郎読本臨時創刊』（河出書房、1949・3）

『国文学解釈と鑑賞特集谷崎潤一郎』第48巻8号（至文堂、1983・5）

『国文学 解釈と教材の研究』（学灯社、1998・5）

『国文学年次別論文集近代2』（学術文献刊行会、1992・6）

『国文学解釈と教材の研究』第43巻6号（学灯社、1998・5）

「単行本」

『谷崎潤一郎の文学』（塙書房刊、1967・7）

『論考谷崎潤一郎』（桜楓社、1980・5）

『性と性格』（村松書店、1980・5）

『谷崎潤一郎全集第4巻』（中央公論社、1981・2）

『谷崎潤一郎全集第22巻』（中央公論社、1981・8）

『谷崎潤一郎全集第7巻』（中央公論社、1981・9）

『谷崎潤一郎全集第18巻』（中央公論社、1982・4）

『谷崎潤一郎全集20巻』（中央公論社、1982・6）

『谷崎潤一郎全集第19巻』（中央公論社、1982・11）

『イメージシンボル事典』（大修館、1984・3）

『潤一郎ラビリンス V』（中央公論社、1998・9）

『谷崎潤一郎—母性への視点—』（有精堂、1988・7）

「事典類」

『日本国語大辞典』（小学館、1972・12）

K C I

要旨

本稿では、「母を恋ふる記」（「大阪毎日新聞」1919・1・18～2・19、「東京日日新聞」1919・1・19～2・22）と「少将滋幹の母」（「毎日新聞」1949・11・16～1950・2・9）において、谷崎の母への憧憬とエロティシズムの世界を検討してみた。

谷崎が「母を恋ふる記」の中で述べている重要なことは、自分の母を若くて美しい母、つまり永遠なる女性として保存したいという願望である。この作品には「私」と現在の「私」が存在するが、夢を見ているのが子供の「私」であり、その時期に戻りたいという強い願望があるので、幼少時代に設定したのである。「私」の宿願であった若くて美しい母に夢の中で会えるようになっており、その宿願の達成は、「私」が子供であったため成立しているが、眼が覚めると、今までのことが夢であったことがわかる。夢の中で「母」と「私」が一体化したのである。谷崎の母への憧憬は、母に対する愛ではなく、醜い母の容貌を抹消して、美しい肉体の女性、官能の快楽を求めめるため、少年の眼でみている官能を享受したのである。

「少将滋幹の母」は一千年前の日本の上流社会にあった説話に作家の空想を加えて、作り出したものである。この小説は一部では説話の形式をとっているが、その後二部で描かれる語り手の日記の部分が谷崎の空想によるいわば、谷崎の個人的な独白である。滋幹の日記を見ると、滋幹は44、45才で、母は60才前後である。滋幹はその歳になっても母のことが忘れられず、5、6才の子供の頃のことが記憶に浮かび上がってくる。滋幹の美しく尊い母への思慕の情は特別であり、彼の頭は「母への憧憬で埋まっていた。そして、その母は滋幹によって理想的なものに美化される。滋幹の中にある母のイメージは22才の「髪の長い頬の豊かな貴婦人」であったが、現在は60才を越した老婆であり、世を捨てた尼になっている。滋幹は現在の母、つまり尼になって母が住んでいる西坂本を訪ねる。結局は滋幹は母に会えるが、子供でないと母との再会は不可能であるというふうに話が設定されている。こうした奇抜な設定に子供対母という一つの愛の理想の形式を提示しようとする谷崎の執着が、また、美しい夢の勝利が伺える。この作品の中でもやはり母との再会は夢の中で成立し、それも子供の世界で成就するのが重要なポイントである。ここで注目したいのは、崇高な母のイメージの描写だけではなく、妖婦的な母の描写である。

谷崎は母の白い肌のイメージから女体美の理想を形成し、それがエロティシズム重視の傾向にまで発展するようになる。この二つの作品の共通点は亡き母との再会が夢の物語において実現している点と、母の美しい姿を通して女体＝美であるという図式を構築したことである。

キーワード：白い肌、再会、夢、女体、子供、母、妊婦、憧憬、快楽、官能

투 고 : 2006. 5. 31
1차 심사 : 2006. 6. 10
2차 심사 : 2006. 7. 1

住 所 : 韓国—대전시 서구 괴정동 KT빌리자아파트 102동302호
日本—福岡市 城南区 荒江 1—35—6 Uハイムマツマル306号
電 話 : 韓国—010—6767—1076
日本—080—5217—3996
e-mail : 韓国語—goldmountian@hanmail.net
日本語— murung22000@yahoo.co.jp

K C I